

## 私とハンセン病

名誉教授 日下 喬史

私は1926年(大正15年)の生まれで、もうすぐ満80歳になる。物心がついてから今までの人生で、一番懐かしかったのは何時頃だろうと振り返ってみると、意外なことに、それは人生を一番辛く感じた時、またその辛さに耐えて一生懸命頑張った時である。人は大抵、一番嬉しかった時を思い出し易いとはよく聞くが、私の場合どうもそうではないようだ。第2次世界大戦直後の海外留学、新婚、住居新築など嬉しかったこともあるが、それらの思い出より遙かに懐かしく思い出されるのは、辛かった仕事のこと、なんとか辛さに耐え抜いた時のホッとした気持ちなどである。

やはり、私は生化学者の一人であったのだと自負出来る。一流であったか二流であったかは問題ではない。私は私の人生の大半のエネルギーを生化学の研究に注ぎ込んだ。これだけは紛れのない事実なのである。その意味で私は生化学者であったと誰に向かっても宣言することが出来る。その根拠は、1950年のベルギー国、ルーバン大学への留学から始まり、岡大医学部生化学教室員、国立らい研究所(現国立感染症研究所ハンセン病研究センター)主任研究員-在任18年間-米国、ウィスコンシン大学留学を経て、川崎医大生化学第二教室主任-在任19年間-を終えるまでの正味40年間、すなわち私の今迄の人生の丁度半分を生化学の研究に没頭出来たからである。

では、その間どんな研究をして来たのかについて述べるのが順序なのであろう。しかし、私はこの原稿を単なる研究報告書のものにはしたくない。それより、私が研究生活を通して得た何物にも換え難い私のみの宝は何だったのかについて述べてみたい。約40年間の私の研究成

果は約50篇の生化学論文として専門誌に残されている。この数は決して多くはないが、問題は内容であろう。研究論文の基本条件は言うまでもなく内容の独自性である。世界で、または地球上で唯一人、自分しか明らかにしなかった内容が含まれていなければならない。世間には内容は既論文と同じでも、表現の仕方や体裁を変えた、いわゆる偽論文もかなりある様だが、それらは論外である。私は自分の論文の中でも一番宝と思っているのは、ハンセン病菌の外側に被っている菌膜中に存在する特種脂肪酸(ミコール酸)の化学構造を決めた論文(International Journal of Leprosy, 1981, 406-416) だと思う。題名を訳すと、「らい菌および鼠らい菌含有ミコール酸の分離と同定」である。

この論文について話す前に、何故私が、今でもそうかもしれぬが、今から数十年前は今よりもっと恐れられていた感染菌の一種であるハンセン病菌の研究を手掛けるようになったかについて触れたいと思う。前述のように私の生化学研究生活は、第2次世界大戦敗戦後、未だ5年しかたっていない1950年のベルギー留学から始まった。当時は米国とソ連(現ロシア)は何れもナチスドイツと戦った同盟国ではあったものの、核兵器製造のために鎬を削っていた。偶々、アフリカのベルギー領コンゴからウランが大量に発掘され、その発掘権を独占するために、米国がベルギーに大々的な財政援助をした。したがって、当時ヨーロッパでもっとも裕福な国は戦勝国のイギリスやフランスよりもベルギーであった。私は当時ベルギーで最も歴史の古いルーバン・カトリック大学医学部生化学教室のC. de Duve教授の研究室に留学させてもらった。同教授は米国の有名な生化学者C. F. Cori

博士の直弟子であり、後にノーベル賞を受賞された。同教授のもとで、私は当時日本では殆んど手を付けられていなかった酵素化学の研究手法を学び、丸2年間必死で研究に没頭した。留学生活開始後半年位たって、やっとフランス語(ベルギー国の用語はフランス語かオランダ語であり、ベルギー語は存在しない)の会話にも馴れ、研究生活にも馴れた頃、ノイローゼになった。生まれて初めての極度の緊張感から来たものであったが、当時は本気で死をも考えた。その危機を救ってくれたのは、ベルギーで或る事業に成功され、ベルギー人の女性と結婚されている或る日本実業家であった。彼の豪華な邸宅で丸10日間静養させていただいたおかげで急速に回復することが出来た。その頃の思い出も次々と沸いて来るが、主題から外れるので、これくらいで止める。要は、人は何かとても困難な状況に陥っても、最後まで諦めずに頑張れば、必ず「拾う神あり」で、何処からか善意の方が現れて助けて下さると言うことであろう。

さて、丸2カ年間の留学を終えて帰国してみると、敗戦後7年たった日本も、やっと復興のピッチが上がって、かなり活気が感じられつつあった。私は母校岡山大学医学部生化学教室に復職を許され、まもなく筆頭助手に抜擢された。当時は医学部でも欧米からの留学帰国者は数名しかなく、地方新聞にもヨーロッパよりの帰国者談として私のことが報道された。戦前、戦後の約10年間は外国文献が日本では入手しにくかったこともあり、教室の先輩各位も有機化学分野ではエキスパートであったが酵素化学に関しては殆んど知らないという有様であった。当時30歳前で、人間的にも未完成であった私は、生来の自惚れが出て、自分では気付かぬまま先輩諸先生を見下す態度があったらしい。とうとう或る教室員との感情的もつれから、教室に居辛くなり、次第に何処か自分に相応しい施設はないかと考えるようになっていた。

丁度その頃、岡山県邑久町のハンセン病療養所、長島愛生園を訪問したいと言う或る私人の社会事業家があり、県でフランス語の通訳を探

していたが、大学から私を推薦したらしく、学長から直接依頼を受けた。もちろん私はその任を果たしたが、その時愛生園訪問に同行した厚生省の役人から、「ハンセン病の国立研究所が近々東京に出来るが、生化学研究室長の人事が未定である。ついては貴君を推薦したいがどうか？」との申し出があった。私はこれこそ自分の進むべき道、大袈裟に言えば神のお告げと喜び、その場は「近日中に返事します」と答えたものの、内心では承諾を決めてしまっていた。これが私がその後20年近く、ハンセン病の研究に入った経緯である。

以上からお分りのように、私がハンセン病の研究に入った動機は、人道的な色合いは皆無とは言えぬまでも希薄であり、大半は当時の職場(岡大生化学教室)への不満にあった。したがって、ハンセン病研究所に赴任後しばらくは大学の古いしきたりにとらわれず、自分の実力を試したいという意欲が支えとなり、色々と研究室創設の苦勞に打ち勝って、とにかく夢中で働いた。その後も、研究の辛さと喜び、つまり「研究とは何か」を心に問いつつ、約20年間のハンセン病研究所勤務を続けた次第である。

「本当の研究とは何か？」それは人が全身全霊を注ぎ込んで努力した時、初めて天が与えてくれるものである。これは研究のみに限らず、いわゆる芸術作品、ひいては色々の未知の分野を開拓している人々についても言えることではあるまいか。前述した様に、地球上に唯一人、自分でしか為されなかったことを成し遂げた慶びであろう。不肖ながら、私もこの慶びを天から与えられた。その代表的なものが前述の「らい菌、鼠らい菌含有ミコール酸の分離と同定」の研究である。これは分かり易く言うと、らい菌の外膜の、しかも最外側にあるミコール酸と称する一種の高級脂肪酸の化学構造を同定(化学構造を決定することを同定という)したと言うことである。では一体、らい菌の表層構造の一部が明らかにされたことが、ハンセン病の撲滅上どの様な意義があるのか、ひいては人類の福祉にどれだけ役立つのかと問われると、



何とも答えられない。正直に言って今のところは実用上特に役立つことは何もないと言わざるを得ぬであろう。しかし、そのこと自体について私は余り問題としていない。もちろん、私達の研究が契機となって新しい強力な治らい薬が開発されれば、これ以上の幸いなことはないが、それが私の在世中には出来なくても、とにかく「人類の未知のある部分」を自分が明らかにした、しかも聖書時代あるいはもっと以前から人類が最も嫌がり恐れていたらい菌のある部分の構造であるという自己満足で充分なのである。

振り返ってみると、川崎医大創設期に第二生化学主任として（第一生化学主任は故山崎三省先生）迎えられて以来でも、はや30有余年が経過した。川崎医大赴任の一番の動機が、実は教育に対する情熱よりも新しい研究用計測機器の使用であった。このことは、初代学園長川崎祐宣先生が就任時に、「何よりも教育に力を傾倒して欲しい」と言われたお言葉にやや背く様で心苦しいが、しかし臨床医学者はともかく、基礎医学者は本当の研究を経験して初めてその人独自の教育観が生まれるものと信じる。私の前述のらい菌の化学構造に関する研究も、実は川崎医大創設時に生化学センター、RIセンターに設置された、当時最新の計測機器を存分に使用させて頂くことにより、初めて成就出来たことを述べ、川崎祐宣先生はじめお世話になった諸先生、皆々様の御愛顧に改めて感謝しつつ擱筆させて頂く。